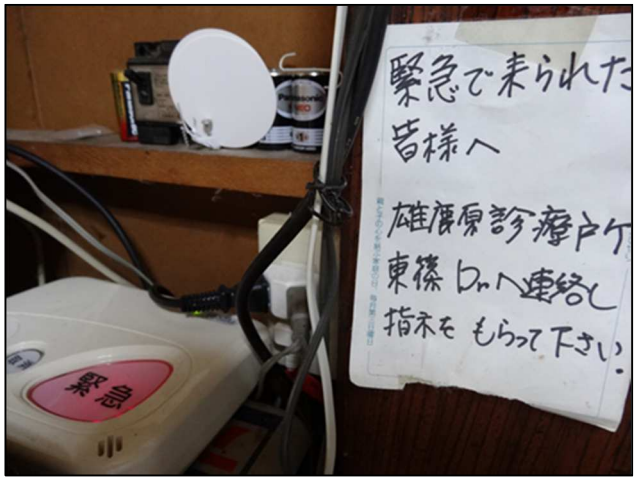
演題 47	独居高齢者の最期を検死にしたくない
	発　表　者　**東條 環樹**（広島県　北広島町雄鹿原診療所）

【目的】少子高齢化、人口減少社会が直面する切実な問題として独居高齢者の増加がある。しかし行政、公的機関からも具体的な対策は示されておらず、個別事例に対して現場で無力感を感じながら後手に回り続けているのが現状である。当診療所は広島県の中山間僻地に位置し、入院施設がエリア内にない無床診療所であるが、地域で最期を過ごしたい住民の期待に応えるため終末期を含めた在宅ケアを提供するべく多職種連携しながら努めている。しかし、対象者が皆穏やかに死亡診断書作成に至るわけではない。最期に検死になることが遺族のみならずサービス提供者にも大きな禍根を残すため、急変時、事態変化時の連絡体制構築が課題であった。

【方法】今回の主役は 80 歳を過ぎた独居男性。妻を数年前に自宅で看取り、人生の大きな仕事を終えている重症 COPD 罹患者。口癖は「先はそう長くない、家で死ねたら本望じゃ」で、そう言い切る住民の意志を尊重しつつ、急変時、第一発見者となりうる住民に対し、死亡発見後に検死となるリスクを回避するネットワークを検討した。



【結果】ケアマネジャーが本気になって本人、家族、地域住民（隣近所、地域の世話役である民生委員）、消防職員とネットワークを作るべく、自宅でのカンファレンスを開催した。医療機関（診療所、訪問看護）の果たす役割を明確にすることで、法に触れない範囲でなるべく検死にならない方法を模索した。固定電話の前には急変時の連絡先を明示し、消防職員にはあらかじめ情報を提供し、担当医である

診療所医師が到着するまでの手順を共有した。

【結論】個別事例対応を積み重ねることにより地域全体で看取りを考える機運も高まり、これまで医療専門職が主体で行ってきた在宅看取りの取り組みが地域に広がることを期待したい。今回のきっかけとなった高齢独居男性は幸い現時点で御健在。